

オープンサイエンスを推進するデータ基盤とその利活用に関する検討委員会
(第25期・第13回)
議事要旨

1. 日時 令和5年9月26日(火) 19:30~21:00

2. 会場 オンライン会議(ZOOM)

3. 出席者(五十音順、敬称略) :

秋葉 澄伯、喜連川 優、木部 暢子、小林 武彦、小安 重夫、三枝 信子、穴戸 常寿、
高木 利久、筑本 知子、寺崎 浩子、永井 由佳里、西田 眞也、林 和弘、菱田 公一、
溝端 佐登史

オブザーバ : 山地 一偵 (NII)

事務局 : 佐々木 亨、齊藤 美穂、稲元 祥吾

4. 議題

- (1) 前回議事要旨の確認
- (2) 今期の委員会活動報告について
- (3) その他

5. 配布資料

資料1 : 第12回議事要旨(案)

資料2 : 議事資料

6. 議事

(1) 前回議事要旨の確認

定足数を満たし委員会の成立を確認した後、資料1に基づき第12回の議事要旨(案)を承認した。

(2) 今期の委員会活動報告について

喜連川委員長から、第25期の活動について概要説明が行われた。今期の主な活動として、内閣府からの審議依頼に対する回答の作成作業、学術フォーラムと公開シンポジウムの開催等があった。次期への申し送りについては本日の説明資料を残すこととする。

このほか各委員から以下のような意見が出された。

- ・データ駆動やデジタル化は原則必然的な流れと受け止めるが、「忙しくなりたくない、楽になりたい」という研究者の気持ちを大切にすべき。これはデータ駆動型研究を進めるに際して、種々の作業が必要となり、従来研究者が確保出来ていた本来の研究時間が相対的に圧迫されていえなくもない現象が出ていることからの心配。

- ・本オープンサイエンスの課題別委員会はこれで3期にわたり検討し、知を積み重ねてきているが、最近になって、DXなる名称とともに類似の議論がなされるに至っている。オープンサイエンスという用語がデータ駆動型研究に直結しないことから、そのような議論がなされている可能性があり、学術情報・研究のDXについては日本学術会議の中で同様の議論を進めていると推察される他の委員会とも会話をすることが必要かもしれない。
- ・一方で、生成AIのような新しい技術も検討することが望まれる。生成AIは分野別委員会情報学委員会の配下のITの生む諸課題検討委員会において、実参加者が1,000人を超えるシンポジウムが開催されており、協調も考えられよう。
- ・分野によって想定するデータもオープンサイエンスに対する考え方も違うことを引き続き考慮し、複数の部や多様な分野の人が一緒に議論できるように工夫することが望ましい。
- ・「オープンサイエンスのためのデータ基盤ハンドブック」を公開したことは大きな成果であった。人文・社会科学分野等にも浸透していくことを期待している。
- ・ハンドブック作成の活動は国立情報学研究所で実施され、学術会議との機動的連携が極めて有益であることを示した好事例と言えよう。個人情報取り扱いを中心にハンドブックを作成したが、現時点では、引き続き、情報システム研究機構において財産権に発展しており、同種の検討が今後も期待されよう。
- ・内閣府の審議依頼への回答については、次期の委員会で提言を実践に結び付けるようなフォローアップが重要である。
- ・研究の自動化や生成AI等のシンポジウムには多くの参加者が集まるが、データに関連するオントロジーの整備やメタデータ付与はデータ形式標準化等の地道な基盤整備のところにも光を当て、議論を深めることが必要であろう。
- ・データの増加速度が速く、また、デジタル技術の進歩が日進月歩となり、研究者の忙しさが増していると感じられ、人間の満足度(Well-being)をより配慮すべしという視点での議論が望まれる。新技術は、研究者を置き去りにすることなく、研究者のWell-beingを高める方向で発展させるべきかもしれない。
- ・デジタルデータに加え、掘削試料や動植物の標本を始めとする物質的な試料の保存・公開についても改めて議論する必要がある。
- ・様々な分野の研究者と前向きに議論できるようになったのは大きな前進である。これからは若い世代の自発的な議論も促していく必要があるだろう。

(3) その他

次期への申し送りとして、本日の議論のまとめた上で、資料2として残すこととする。

また、本委員会の最終的な議事要旨の決定については、委員長一任とすることとする。

以上